

中国の在留邦人における文化適応課題の検討

— 日中文化の相違点の認識に関する調査から —¹⁾²⁾

毛 新華 神戸学院大学心理学部 清水 寛之 神戸学院大学心理学部

木村 昌紀 神戸女学院大学人間科学部

**A study on the intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China:
Based on an exploratory survey of awareness on cultural difference between Japan and China.**

Xinhua Mao (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Hiroyuki Shimizu (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

Masanori Kimura (*School of Human Sciences, Kobe College*)

To clarify the intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China, this study aims to obtain basic data on the perception and awareness of the differences between Japanese and Chinese culture through exploratory research. We conducted an open-ended questionnaire survey of 53 Japanese expatriates in four Chinese cities. In the survey, three questions were asked to elicit the characteristics of Chinese interpersonal relationships as perceived by Japanese, such as “What troubled you in your interpersonal relationship with Chinese people?”. The obtained descriptions were organized using the KJ method. The similar description for each question was classified as a small category, and small categories of similar meaning were classified as a middle category. After the common small categories were integrated with the middle categories by cross-sectionally organizing the three questions, the middle categories were examined longitudinally, and four big categories were extracted as higher-level concepts. Specifically, two middle categories, such as unique institutions and lifestyles, constituted “social institutional aspects,” seven middle categories, such as self-centeredness and strong self-expression, constituted “temperament and personality aspects,” six middle categories, such as disregard for privacy, constituted “interpersonal aspects,” and two middle categories, such as lack of responsibility, constituted “work aspects”. In the future, we will conduct a large-scale survey based on these findings to empirically examine the structure of intercultural adaptation tasks of Japanese nationals overseas in China.

Keywords: Japanese nationals overseas, China, intercultural adaptation tasks, cultural difference.

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2021, Vol.4, No.1, pp.31-40

問題と目的

日本と中国の交流

2021 年 8 月の時点で、新型コロナウイルス感染症

- 1) 本研究は日本心理学会第 85 回大会 (2021 年 9 月) において発表された。
- 2) 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 21K02991, 15K17260, 17K04510, 16K04276) の助成を受けた。

の影響はまだ収まっていない。この感染症により、国を超えて行われている経済交流など、さまざまなことが制限されている。こうした状況にもかかわらず、地政学的に近接している日本と中国の間では、なお交流の必要性が高い。感染症が流行している最中である 2020 年時点でも、中国での仕事や勉強などを目的とする中長期在留の邦人は、感染症流行以前の人数とほぼ変わらず、約 11 万人で、在留邦人数首

位のアメリカの 42 万人に次ぐ (外務省, 2021)。

日中両国の本格的な経済・文化交流は 1980 年代後半の中国の改革開放政策にさかのぼり, 2000 年代から引き続いて現在, これまでにない活況を呈している。日本の海外企業の半分が中国にあり (外務省, 2021), 日本人の海外留学先として, 中国も上位の選択肢とされている (日本学生支援機構, 2021)。

両国の経済的交流や人的往来により, 多くの邦人が中国に滞在している。しかし, 日中両国の対人関係と行動様式の違い (木村・毛, 2013a, 2013b; 園田, 2001; 吉村, 2012 など) により, 現実には, 日本人と現地の人々との間で対人トラブルが生じたり, 日本人が対人ストレスを抱えたりする状況が少なくない (西田, 2007)。そこで, 在留邦人の中国文化適応, とりわけ中国人との間の円滑な対人関係の形成を促進することが必要不可欠な事項となっている。本研究では, こうした社会的必要性を踏まえて, 日本人の中国人との対人的トラブルにつながる原因である, 中国在留邦人の中国文化への適応課題について探ることを最終的な目的とする。

異文化適応に関わる心理学の視点

鈴木 (1997) は, ホストとゲストの観点から, 人々が異文化と触れあう際に, 「異文化接触」と「異文化体験」という 2 つのパターンがあることを指摘した。異文化接触とは, 日本人が来日した他文化の人と関わる時に, 自文化の環境下で他文化の人々との間で生じる相互作用を指す。一方, 異文化体験とは, 日本人が他文化を訪れて他文化の人々と関わる時に, 自文化を離れ, 他文化に移行することで他文化の人々との間で生じる相互作用を指す。このうち, 新しい環境への移行に伴う「異文化体験」において, 個人がこの新しい環境 (異文化の環境とメンバー) との間に適切な関係を維持し, 心理的な安定が保たれている状態が「異文化適応」である。

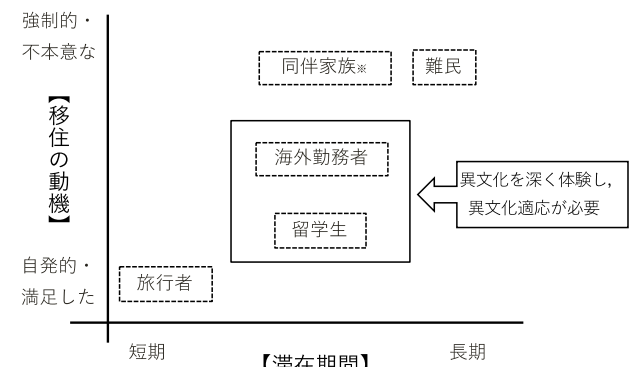
一方, 異文化に移行後, 自文化に戻るか否かによって, 異文化移行者を永住者と一時的滞在者 (非永住者) に分けることができる。鈴木 (1990) は, Furham & Bochner (1986) が提示した滞在期間と文化間移行の動機の 2 つの観点を援用し, Figure 1 のように一時的滞在者を分類した。この分類によると, 留学生や海外勤務者は異文化に中長期的に滞在し, 留学生, 勤務者の順に本意-不本意な動機をもっている。一方, 旅行者は自発的ではあるが, 短期間しか滞在せず, 難民は強制的・不本意な動機のもとに長期間の滞在を余儀なくされる。このように考えると, 留学生や海外勤務者の多くは, たとえ不本意な部分があったとしても, 滞在には比較的明確な目的や目標, 理由があり, 目標達成のために現地の人々との対人的なやり取りをして, 対人様式に馴染み, いわゆる異文化に適応する必要があると考えられる。本研究では,

こうした滞在期間と文化間移行の動機という 2 つの観点から, 一時的滞在者のうち, 留学生と海外勤務者を中心に議論を進める。

異文化との出会いがもたらす諸問題

人々が異文化と出会うと, 新しい環境の下で心理的に混乱した状態に陥ることが多い。Oberg (1960) はこの心理的混乱を「カルチャーショック」と呼んでいる。近藤 (1981) は, カルチャーショックの対象を「自然環境」と「社会環境」に分類した。前者の例としては, 気候や風土などが挙げられる。後者の「社会環境」に対するショックは, さらに「人間環境」, 「精神的・文化的環境」, 「物質的環境」に分けられた。「人間環境」はその社会を構成する人々で, 「精神的・文化的環境」はその社会で共有されている価値観などの精神的・習慣的なもので, 「物質的環境」は衣食住に関する事柄である。また, Cushner & Brislin (1996) は, 異文化との出会いがもたらす問題領域として, 「強い感情」, 「知識領域」, 「文化的相違の基礎」を挙げている。「強い感情」は不安, 確証がない予測, あいまいさ, きずな, 偏見との対決, などを含む。また, 「知識領域」は仕事, 時間空間の方向付け, コミュニケーション, 役割, しきたり, 集団と個人の重要性, 階層と地位, 価値観, などを含む。そして, 「文化的相違の基礎」はカテゴリー化, 情報分化, 帰属, 内/外集団の区別, 学習, などを含む。

カルチャーショックに代表される, 異文化との出会いがもたらす諸問題は永遠に続くわけではなく, 個人の資質, 能力, あるいは努力により, 異文化に慣れていくことが「異文化適応」となる。この「慣れ」の過程を巡って, Lysgaard (1955) の U カーブ理論や Adler (1975) の 5 位相説をはじめとして, 様々な異文化適応プロセスに関する考え方が提示されている。これらのプロセスは, いずれも, 異文化に対する新奇感から始まり, 適応課題に出会うことによ



*同伴家族は必ずしも強制的・不本意であると限らない

Figure 1
文化間移行の型と異文化適応の関係性
(鈴木, 1997 より改変)

て、次第に感情的な落ち込みが発生する。その後、課題を克服することを通して、落ち込んだ感情状態が回復し、最終的に立ち直って、異文化に十分に適応する段階に至る。

適応のプロセスにはしばしば「文化変容」が伴う。文化変容とは、個人が異文化とうまくやっていけるように、接触の度合、周囲の状況、心理的な特質を変えようとする過程である (Berry, Kim, & Boski, 1988)。Berry, Poortionga, Segall, & Dasen (1992) や渡辺 (1995) は、適応段階を「前接触」、「接触」、「葛藤」、「危機」、「順応」に分け、「危機」段階において「文化変容」が4つの様態で起きるとしている。この4つの様態は、「同化」、「統合」、「離脱」と「境界化」である。「同化」は自文化が保たれず、異文化に溶け込む状態で、「統合」は自文化の維持と異文化への変化との間にバランスが保たれている状態、「離脱」はほぼ自文化に閉じこもっている状態で、そして、「境界化」はどちらの文化も保たれず、二つの文化の間で葛藤する状態である。「危機」という適応段階は、どのような文化変容にでも発生しうるわけであり、中長期の滞在者にとって、異文化の中で自らの目的を達成するために、統合という文化変容に至ることがより生産的だと考えられる。一方、箕浦 (1990) が指摘しているように、ある文化型から他の文化型への行動形態の置き換えは年齢を重ねるにつれてだんだん難しくなる。認知、行動、情動の3つの視点から見た際に、成人が長く異文化に滞在して、認知と行動は相手文化のものに変容できるが、情動は自文化のものにとどまる場合が多い。

異文化適応のポイントと日中の対人関係の特徴

異文化への適応ポイントとしては、相手国のコミュニケーションの仕方の習得 (鈴木, 1997) や相手国の人々との対人関係の形成 (田中, 2000) が指摘されている。相手文化の対人関係を考える際に、自文化との共通点と相違点をきちんと認識して対応することが効果的であろう。Berry (1989) はこのような対人関係の文化的特徴を文化共通性と文化特有性に弁別する etic-emic アプローチを提案している。このアプローチに従えば、相手国との対人関係の構築には、文化共通性の特徴とともに、文化特有性の事柄に注目すべきである。日本人の中国文化適応という文脈においては、両文化の共通点と相違点を把握すべきである。

日中両国は古くから交流があり、人々の行動様式に儒教思想の影響を強く受けていて、文化的に似ていると言われている (毛・清水, 2019)。文化比較研究の観点から、両国はともに集団主義文化 (Triandis, 1995)、高コンテクスト文化 (Hall, 1976) に所属し、両国民はいずれも「相互協調的自己観」 (Markus & Kitayama, 1991) や「弁証的思考様式」 (Peng &

Nisbett, 1999) をもっているとされている。一方、日中両国の対人関係の特有性としては、これまでに社会学や心理学の分野から多くの知見が示されている。日本人の特徴としては、「以心伝心」 (近藤, 1981) や「間接的」、「婉曲的」、「示唆的」 (Takai & Ota, 1994)、「他者依拠的に対人行動を決めること」 (箕浦, 1990)、そして、「他者に気を配り、感情をあまりあからさまに表に出さないこと」 (天児, 2003) などが挙げられる。これに対して、中国人の特徴としては、「メンツ」、「関係主義」、「人情」の重視 (Hwang, 2006)、強い自己主張 (天児, 2003; 吉村, 2012)、そして、コネの重視 (毛・大坊, 2012, 2016) などが挙げられる。

本研究の目的

以上の議論を踏まえて、本研究では、成人である中国にいる留学や駐在などを目的とする中長期在留の邦人を対象に、彼らの中国文化適応の課題について考える。具体的には、在留邦人の中国人との対人関係における適応課題を探るため、まずは自由記述の手法を用いた探索的調査を通して、日中文化の相違点の認識や気づきに関する基礎的資料を得ることを目指す。

方法

調査対象者と調査方法

本研究では、中国の在留邦人 53 名 (男性 36 名、女性 17 名) を対象とした。調査対象者の平均年齢は 41.4 ± 11.64 歳 (10・20 代: 8 名, 30 代: 15 名, 40 代: 17 名, 50 代: 11 名, 60 代: 2 名) であった。調査は調査会社イプソスを通して、日系企業の多い中国の 4 都市 (大連, 北京, 上海, 広州) で質問紙を配布・回収した。調査時期は 2016 年 9 月～10 月であった。³⁾

調査内容

本研究は、フェイスシート項目として、性別・年齢・日本での出身地、中国での滞在都市、滞在資格、そして、中国人に接した年数、中国での滞在年数、中国人の友人の有無を設定した。

一方、日本人の中国人との対人関係の観点から、中国人の特徴、中国人が日本人を困惑させる点など、自由記述調査の項目を設けた。具体的に、調査対象者に、以下の3つの質問について、箇条書きで回答を求めた。

質問 1. 中国での生活の中で、中国人との対人関係

3) 本研究は、倫理的配慮として、質問紙のフェイスシートにて、得られた回答は学術の目的以外に使用しないこと、個人を特定しないこと、回答を自らの意思で中断が可能であることを伝えた。

において、「やはり中国人は日本人と異なっている」と感じる点は何でしょうか（以下、「対人関係で中国人が日本人と異なっている点」とする）。

質問 2. 中国人との対人関係において、彼らがあなたを困らせたのはどのような点でしょうか（以下、「中国人があなたを困らせた点」とする）。

質問 3. 中国人同士の対人関係の「特徴」として、どのような点が挙げられますか（以下、「中国人の対人関係の特徴」とする）。

分析方法

フェイスシート項目に対して、調査対象者の基本属性として平均値の計算など、基本集計を行った。一方、自由記述調査の項目から得られた記述を KJ 法（川喜田, 1986）で整理を行った。その際、日本の大学に勤めている中国人の大学教員 1 名（社会心理学専攻, 在日年数 20 年）と日本人の大学教員 1 名（社会心理学専攻）、そして中国人大学院生 1 名（社会心理学専攻, 来日年数 3 年）が協議をしながら、回答の分析・整理を行った。

なお、本研究は、得られた文字データからカテゴリーへと整理することで、カテゴリーの抽出およびカテゴリー間の関係を明らかにすることを目的としている。これまでに数多くの文字データの整理方法が開発されている中、KJ 法は、断片的な情報を効率よく整理・グループ化して、まとめること（川喜田, 1986）に長けている。そこで、本研究の目的の達成に、KJ 法が適切な手法であると考えられ、採用されることとなった。

結果と考察

本研究の調査対象者の基本属性

調査地域別の人数 本研究の調査地域である中国 4 都市の調査対象者の内訳としては、大連から 21 名、北京から 11 名、上海から 11 名、広州から 10 名であった。大連の 1 つの地域だけでサンプル全体の約 4 割を占めている。北京からの 11 名と合わせて、本研究の対象者の 6 割が中国北部に滞在し、得られた回答は中国北部での経験による内容が多い可能性がある。また、対象者は 53 名で、絶対数が少ない。

滞在形態 駐在員・現地採用社員は 31 名、経営者は 2 名、留学生は 10 名、家族滞在者は 8 名、教員は 1 名、未回答は 1 名であった。企業に勤めている会社員が全体の 6 割を占めているため、回答内容が企業での経験によるものが多い可能性がある。

日本での出身地 東北地方は 1 名、中部地方は 5 名、関東地方は 30 名、関西地方・四国地方は 11 名、中国地方は 4 名、九州地方は 2 名であった。関東地方出身者は全体の 6 割を占めている。

中国人の友人の有無 「いる」と答えたのは 46 名で、「いない」と答えたのは 7 名であった。全体の約 9 割弱が中国人と友人関係を構築している。

中国人に接した年数 調査対象者が日本にいた時の経験も含めて、中国人に接した平均年数は 9.3 ± 8.24 年であり、範囲は 0.5–40 年であった。その内訳としては、3 年未満は 12 名、3–5 年は 9 名、6–10 年は 16 名、11–15 年は 7 名、16–20 年 6 名、20 年以上は 3 名であった。

中国での滞在年数 調査対象者の中国での通算した滞在年数の平均値は 5.4 ± 4.00 年であり、範囲は 0.5–16 年であった。その内訳としては、3 年未満は 17 名、3–5 年は 16 名、6–10 年は 14 名、11–15 年は 5 名、16–20 年 1 名であった。

上記にある「中国人の友人の有無」、「中国人に接した年数」、そして、「中国での滞在年数」の結果から、本研究の対象者の中で中国人との関わり合いが相対的に深い日本人が多くいた。したがって、得られた回答はこのような人々によって提供されたものだと考えられる。また、個々人によって異文化の地を訪れてから経過した時間が異なっているが、本研究の調査対象者における中国および中国人との経験年数から総合的に判断すると、異文化適応プロセスの「葛藤期」（Berry et al., 1992; 渡辺, 1995）にいる対象者が多いと推測される。

自由記述調査データの整理の結果と先行研究との対応

本研究では、質問 1. 対人関係で中国人が日本人と異なっている点、質問 2. 中国人があなたを困らせた点、質問 3. 中国人の対人関係の特徴、という 3 つの質問から順に 207, 174, 157 記述、1 人当たり平均で順に 3.90 ± 0.50 , 3.28 ± 1.50 , 2.96 ± 1.00 記述が得られた。

調査で得られた文字データに対して、以下の方針に基づいて整理を行った。

1. 質問ごとに同じあるいは似ている記述を集計し、Small Category（以下、SC とする）とした。
2. 質問ごとに SC 同士で意味合いが類似したものをまた集計し、各質問の Middle Category（以下、MC とする）とした。
3. 横断的に、すべての質問で共通している SC および MC を整理・統合した。
4. 複数の MC を縦断的に吟味し、上位概念的なカテゴリーを Big Category（以下、BC とする）として抽出した。

その結果、在留邦人の認識した中国人の特徴に関する BC は、次の 4 つに整理することができた。すなわち、「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」、「BC2. 気質・性格的側面」、「BC3. 対人的側面」、「BC4. 仕事の側面」、であった（Table 1）。

Table 1 中国の在留邦人における中国人の特徴に関する認識の整理

BC	MC	質問1. 対人関係で中国人が日本人と異なっている点 度数	質問2. 中国人があなたを困らせた点 度数	質問3. 中国人の対人関係の特徴 度数	
BC1 社会制度・生活スタイルの側面	国籍・政治的差別	愛国心・大國意識 2 国籍に対する意識 1	日本人に対する差別 6 日本人を特別視する 2 政治・国際関係・歴史の話 3	愛国心 1	
	常識の相違	物事に対する考え方や捉え方が異なる 4 生活習慣・社会事情が異なる 11 食習慣が異なる 4 大切に・重視していること・好み異なる 6	常識・習慣・スタイルが違う 7 コミュニケーションの仕方の違い 5	常識・習慣・スタイルが違う 5 食習慣が異なる 1 コミュニケーションの仕方の違い 3 子どものしつけがあまい・子どもに対する期待 3	
BC2 気質・性格的側面	大陸気質	約束を重視しない 2 時間にルーズ 7 声大きい 6 マナー・礼儀・モラル・公衆道徳のなさ 21 公衆衛生の問題 10 細かいことを気にしない 4 計画性がなく、アバウトさ 3	時間・契約・約束守らない 13 声大きい 3 マナー・公共衛生・礼儀・モラルの欠如 35 掃除しない 2 計画性がなく、突然の注文 8 適当さ 6 素直すぎる 1	大きな声 3 モラルの欠如 1 細かいことを気にしない 5 表裏がない 4	
	フレンドリー	気前が良い 3 取っつきやすさ・フレンドリー 14 親しい人にとことん親しむ 3 人間関係重視 3 対人関係の距離が近い 5	羽振りが良く、割り勘に応じない 2 親切すぎる 1 パーソナルスペースが近い 2	気前が良く、割り勘しない 3 気さくに仲良くなれる・フレンドリー 14 親しくなると、親密・身内扱い・家族のように 18 人とつながることを重視する 4 友達の友達は友達 2 距離が近い・スキミング 5 付き合いが広く浅く 2	
	自己中心的な強い自己表現	自己中心・他人に思いやらない 13 他人の目や思いを気にしない 2 主張が強く、はっきりしている 7 遠慮がない 2 発言がストレート 4 以心伝心が効かない 2 雄弁・おしゃべりが好き 2 強引 1 善し悪しを付けたがる 2 謝らない 4 短気 1	思いやりが少ない 4 人の話を聞かない 3 自己主張が強い 8 遠慮がない 2 自己勝手 4 頼みごとが強引 9 嫌なものをけなす 2 悪くても謝らない 4 言い訳する 3	自己中心的 3 周りのこと気にしない 5 言い合う・意見をはっきり主張する 5 よくしゃべる 2 押しが強い・強引 1 人の悪さを容赦なく 1 怒りっぽい 3	
	人を信用しない	人を信用しない 3	信頼関係の構築に時間を要する 2	人を信用しない 5	
	競争的・非協調		競争意識が強い 1 協調性がない 4	競争意識が高い 2	
	頑固		言葉や会社の仕組みを理解しようとしていない 2 思い込みが激しい 3		
	優しさ	老人・幼児などに優しい 3	親切 1	女性に優しい 1	
	BC3 対人的側面	メンツ・プライド	メンツ重視 6 プライド 2	メンツを気にしすぎる 1	見栄やメンツを重視 8 自分を大きく見せる・自信過剰 3
		家族主義	家族が大事 3		家族や身内を大事にする 12 故郷を重視する 4
		プライバシーの認識	人の個人の問題に入り込む 4	プライバシーの無視 6 ものを借りて返さない 2	プライバシーを無視・噂を拡散する 4
功利的		お金に目がない 3 功利的な対人関係形成 5		拝金主義 2 相手を功利的に付き合う 1	
権力・人脈工作		年功序列 3	人脈の重要性 2	権力や上下関係の世界 13 コネ・人脈の重要性 4 宴会のコミュニケーション 2	
仲直りの難しさ				関係が悪くなると修復不可能 2	
BC4 仕事の側面	責任感のなさ	責任感が薄い 2 仕事にドライ 4 諦めが早い・さっぱり・あっさり 3 サービス従業員の態度の悪さ 4	仕事に責任感がない 4 会社や仕事に熱意がない 5 努力しない 1 レストラン店員の対応の悪さ 2		
	革新的精神	創造力・好奇心 3 合理性・効率の重視 6			

「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」は、「国籍・政治的差別」と「常識の相違」という2つのMCを含んだ。前者は愛国心や日本人への特別視といった内容によって、後者は独自の社会事情による常識などの相違といった内容によって構成された。

これらの結果は対人関係そのものではないものの、対人関係に影響を与える背景要因になり得ると考えられる。この内容は、近藤（1981）の指摘しているカルチャーショックを引き起こす社会環境要因にある「精神的・文化的環境」と一致する。また、Cushner & Brislin（1996）で言及されている異文化との出会いがもたらす課題のうち、とりわけ「知識領域」の「しきたり」や「価値観」、そして、「文化的相違の基礎」の「カテゴリー化」、「情報の分化」、「内/外集団の区別」などのサブカテゴリーと対応している。

「BC2. 気質・性格的側面」は7つのMCを含んだ。具体的には、細かいことを気にしない・マナー/ルールのなさなどといった「大陸気質」、取っつきやすさや対人距離の近さなどといった「フレンドリー」、自己を中心とした主張を通す言動などといった「自己中心的な強い自己表現」、容易に他者を信頼しないなどといった「人を信用しない」、協力より、競争意識などといった「競争的・非協調」、自分に慣れないやり方への拒否反応などといった「頑固」、社会的弱者への配慮などといった「優しさ」、といった内容によって構成された。

「BC3. 対人的側面」は6つのMCを含んだ。具体的に、メンツを重視するなどといった「メンツ・プライド」、家族や身内を最優先するなどといった「家族主義」、他人のプライバシー意識の欠落などといった「プライバシーの認識」、金銭や利益につながる対人関係の形成などといった「功利的」、権力・コネ・人脈形成の働きなどといった「権力・人脈工作」、対人関係修復の難しさなどといった「仲直りの難しさ」、といった内容によって構成された。これらの内容は前述のCushner & Brislin（1996）で言及されている異文化との出会いがもたらす課題のうち、「知識領域」の「階層と地位」や「集団と個人の重要性」、「しきたり」、そして、「文化的相違の基礎」の「帰属」、「情報の分化」などのサブカテゴリーと対応している。

毛・大坊（2006）は、中国にいる（た）日本人留学生を対象に、中国人の人づきあいスタイルに関して、そして、毛（2013）は中国人留学生を指導・世話する立場にある日本人を対象に、中国人留学生の日本文化適応上の課題に関して、それぞれ自由記述調査を行った。この2つの研究においては、カテゴリーの命名が本研究と異なるものの、本研究で得られた「BC2. 気質・性格的側面」と「BC3. 対人的側面」にある内容と一部、あるいは完全に一致している。ただし、それらの研究の結果と比べて、本研究で得られた内容は、より中国人同士の対人関係や中国国

内の独自の事情に焦点を当てるものが多い。

「BC4. 仕事の側面」は「責任感のなさ」と「革新的精神」という2つのMCを含んだ。前者は仕事に対する責任感のなさといった内容によって、後者は創造性などといった内容によって構成された。

上記のKJ法に基づいて得られたカテゴリーについては、本研究の著者たちによって再度吟味・推敲をした。その結果、「BC2. 気質・性格的側面」にあるより「対人的」な性質の強いMC、すなわち、「フレンドリー」、「人を信用しない」、「競争的・非協調」を「BC3. 対人的側面」に移動することとなった。また、3つの質問文から得られたTable1にあるそれぞれのSCに対して、趣旨が重複したものを統合した上、事実関係や行動傾向を文に作成し、より具体的な内容を提示した。最終的なカテゴリーおよび各SCから作成した文をTable2にまとめた。

本分類に対する社会生態学的な考察

Nisbett & Cohen（1996）は社会生態学的視点から米国南部に発生している暴力について説明した。この研究は、アメリカ南部にある入植の歴史的背景にさかのぼって、暴力の多発が、牧畜を行う者にとって重要な財産である家畜が略奪されてしまうと生業を失う「経済的要因」と、安全を保障する公的組織が不十分という「社会環境的要因」にあると帰結した。これらの要因により、南部の人々が自分で自分の財産を守るために自衛や暴力への依存を生み出した。すなわち、環境要因が人々の行動様式を規定すると言えよう。Nisbett & Cohen（1996）にならい、本研究で得られた邦人の認識した中国人の行動様式の源流を、以下のように、中国の自然環境や歴史的背景から探ることができると考えられる。

本研究で得られたMC「大陸気質」に含まれる「細かいことを気にしない」、「アバウトさ」などの気質的な側面は、中国の国土が広いことに起因すると考えられる。広大な国土故に、様々な事柄にきめ細かい配慮を尽くせない可能性が考えられる。また、中国には民族が多く、五千年と言われる長い歴史の流れの中、民族間の融合と抗争が繰り返され、そして王朝の交替が頻繁に行われてきた。このような状況の中で、自分の存在と意見をしっかりと他者に主張し、自らの評判に関わるメンツを重んじて、生存に必要な資源を獲得するために功利的に人脈を作る、などの行動様式は、いずれも自らの存続をかけたものだと考えられる。さらに、常に危機意識のもとで相手と共生し、身内との友好的関係を構築することが必要不可欠で、利害関係のある他者との競争が不可避であったと考えられる。国土が広く、民族が多い中国では、地域間、民族間でそれぞれがもっている基準とルールが入り交じることにより、統一した考え方が難しくなってくる。このことについては、

民族が相対的に少なく、国土が相対的に狭い日本でよく言われている「阿吽の呼吸」のような国民同士の相互理解が、中国において実現されることが極めて難しかったため、現在の中国人もそのようなレベルの相互理解を目標にしないのかもしれない。

本研究で得られた分類に対する仮説的構成

Nisbett & Cohen (1996) の環境要因が人々の行動様式を規定するとの知見に基づき、社会環境そのもの

が人々の性格形成を規定し、その性格がさらに人々の他者との対人関係あるいは物事の処理の仕方を規定すると考えることができる。このように考えると、本研究で得られた分類に対して、以下のような仮説的構成を行うことできる。すなわち、中国人の「BC3. 対人的側面」と「BC4. 仕事の側面」といった活動は「BC2. 気質・性格的側面」に基づいて行われ、その性格や気質の形成がさらに彼らの生活している社会にある「BC1. 社会制度・生活スタイルの側面」に帰結することができると考えられる。さらに、「BC1.

Table 2 中国の在留邦人における中国人の特徴に関する認識のまとめ

BC	MC	内容	BC	MC	内容		
BC1 社会制度・生活スタイルの側面	国籍・政治的差別	中国人は大国意識をもっている。 中国人は日本人に対して差別意識をもっている。 中国人は「日本人は金持ちだ」という意識をもっている。 中国人は歴史や政治の問題に対する独自の見解をもっている。 中国人は日本人と異なる愛国心をもっている。		フレンドリー	中国人は気が良く、羽振りが良い。 中国人は割り勘に応じない。 中国人は初対面であってもすぐに仲良くなれる。 中国人は日本人よりもフレンドリーな付き合い方をする。 中国人は親しい人にはとことん親しくなる。 中国人は親しい人には家族のように親切になる。 中国人は友達を全力で助ける。 中国人は日本人以上に人間関係を重視する。 中国人は人とのつながりを重視する。 中国人は友達つながりで人間関係のネットワークを作る。 中国人は日本人以上に他人との心理的距離が近い。 中国人は他人に対する物理的な距離が近い。 中国人はスキミングが多い。 中国人の付き合いは広くて浅い。		
	常識の相違	中国人は物事に対する独特な考え方や捉え方をもっている。 中国人には独特な生活習慣や社会事情がある。 中国人は独特な食習慣をもっている。 中国人の好みや重要視することは日本人と異なっている。 中国人のコミュニケーションの取り方は日本人と異なっている。 中国人の子どもに対する思いは日本人と異なっている。			メンツ・プライド 中国人は見栄を張る。 中国人は「自分が一番だ」と思っている。 中国人は自分のことを大きく見せたがる。		
BC2 気質・性格的側面	大陸気質	中国人の約束事に対する認識は日本人と異なっている。 中国人は時間を遵守しない。 中国人は大声で会話をする。 中国人は公共の場での礼儀やマナーが悪い。 中国人の倫理道徳意識は日本人と異なっている。 中国は公衆衛生に問題がある。 中国人は衛生状況を気にしない。 中国人は細かい所にこだわらない。 中国人は聞かれたことや頼まれたことに対していい加減な返答を する。 中国人は計画性がない。 中国人はときどき素直になり過ぎる。 中国人は表裏がない。	BC3 対人的側面	家族主義	中国人は親や家族のことを日本人以上に大事にしている。 中国人は近い人とうそうでない人への対応が異なる。 中国人は日本人以上に同郷意識をもっている。		
	自己中心的な強い自己表現	中国人は自分のこと最優先で物事を考える。 中国人は他人に対する思いやりが少ない。 中国人は他人の目を気にしない。 中国人は人の話を理解しようとし ない。 中国人は自分の主張をはっきり伝える。 中国人は自己主張が強い。 中国人はお互いに言い合う。 中国人は遠慮しない。 中国人は発言がストレートである。 中国人は自分勝手なことをする。 中国人には以心伝心が通じない。 中国人は能弁である。 中国人には強引なところがある。 中国人は強引に頼みごとをする。 中国人は良し悪しをはっきりさせたがる。 中国人は嫌なものをけなす態度を示す。 中国人は非があっても謝らないあるいは認めない。 中国人は失敗に対して言い訳をする。 中国人には短気なところがある。 中国人は怒りっぽい性格である。		プライバシーの認識	中国人は他人のプライバシーに入り込む。 中国人は嗜好きである。 中国人には人のものを借りて返さないことがある。		
				功利的	中国人はお金に目がない。 中国人は「お金が全てだ」という考え方も持っている。 中国人は対人関係を作るときに功利的である。		
				権力・人脈工作	中国人は日本人以上に年功序列の考え方も持っている。 中国人は権力者にへつらう。 中国人は人脈やコネによって不平等になっている。 中国人は「宴会コミュニケーション」をする。		
				仲直りの難しさ	中国人人との対人関係がこじれると修復が困難である。		
				人を信用しない	中国人は人を信用していない。 中国人は個人間の信頼関係の構築に時間がかかる。		
				競争的・非協調	中国人は競争意識が強い。 中国人は協調性に乏しい。		
				頑固	中国人は慣れないやり方に対して拒否反応を示す。 中国人は物事に対する思い込みが強い。	責任感のなさ	中国人は仕事に対する責任感が薄い。 中国人は仕事に対してドライである。 中国人は物事に取り組む際、あっさり諦めてしまう。 中国人のサービス業従業員の接客態度は悪い。
						革新的精神	中国人は創造力にあふれている。 中国人は日本人より合理性を重んじる。
	優しさ	中国人は老人や妊婦に親切である。 中国人は女性に優しい。					

注：Table 1 の「BC2. 気質・性格的側面」にある「フレンドリー」、「人を信用しない」、「競争的・非協調」という3つのMCには対人関係の要素が多く含まれると考えられる。著者たちの協議により、Table 1 のKJ法の結果を踏まえ、上記の3つのMCを「BC3. 対人的側面」に移動して、整理をまとめた。

社会制度・生活スタイルの側面」は直接「BC3. 対人的側面」と「BC4. 仕事の側面」といった活動に影響する可能性も考えられる (Figure 2)。

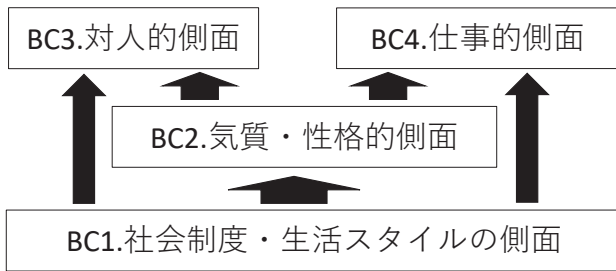


Figure 2 本研究で得られた BC の仮説的構成図

本研究で得られた回答と記憶の関係

西村 (1992) は、異文化に接する場合、違和感ばかりが先に立ってしまうと、異文化への不適応につながる指摘している。そうした違和感や不安は自分のこれまでの記憶などと照らし合わせることによって経験される。しかし、人間の記憶に及ぼす文化の影響を考慮する必要がある。池田・村田 (1991) は、記憶のスキーマが先入観やステレオタイプ、そして偏見などによって歪んでしまうことを指摘している。また、箕浦 (1990) は新しい文化で経験したことに対する理解が生まれ育った社会でのスクリプトの影響を受けるとした。さらに、清水 (2002, 2005) は個人の記憶およびそれを支える認知機能が発達とともにその人が暮らす文化や社会の影響を強く受けると主張した。これらの先行研究から考えると、自由記述調査の方法を用いて、調査対象者の個人の記憶によって得られた本研究のデータは、調査対象者の様々な性格や性質、そしてこれまでの個人的な経験の影響を受けていることを考慮する必要がある。

まとめと今後の展望

etic-emic アプローチ (Berry, 1989) に従えば、対人関係は文化共通的部分と文化特有な部分に分けることができる。本研究で得られた在留邦人の認識している中国人の対人行動上の「特徴」や「相違点」は、日本人にないもの、かつ、中国人に特有な部分と言える。

先述したように、箕浦 (1990) は、文化適応における認知・行動・情動の 3 要素の重要性を強調するとともに、成人期の「文化適応」は認知・行動レベルの変容にとどまると指摘している。この点から、本研究で得られた結果は日本人の中国文化適応に関わる認知面・行動面のポイントになり得ると考えられる。その際に、社会制度・生活スタイル、気質・性格、そして仕事の側面は基本知識 (認知面) として蓄積し、対人的側面は行動の仕方 (行動面) として、

中国人との対人行動に使用できると考えられる。

Berry et al. (1992) や渡辺 (1995) は、異文化適応の段階にある「危機期」での「文化変容」の方向が異文化に対する適応か不適応かの岐路となるため、「危機期」が重要な時期であると示唆した。そのため、「危機期」の前段階にある「葛藤期」にいる人々の経験から得られた本研究結果に基づいて、「葛藤期」において心理的介入を行えば、「危機期」でのスムーズな異文化適応につながるのではないかと予想される。今後、本研究で得られた質的データに基づいて、在留邦人から見た中国人の特徴項目に対して、大規模なアンケート調査を実施し、因子分析などの統計的手法でまとめ、在留邦人の認識した中国人の「特徴」や日中間の「相違点」の構造を検討し、本知見の頑健性を確認する。そのうえで、在留邦人の認識する中国人の特徴や日中文化の相違点と異文化適応を測定する既存尺度 (植松, 2004 など) の関連性を調べ、適応課題を明らかにする。さらに、異文化適応尺度を評価指標として用いながら、在留邦人の中国文化適応のトレーニングを実施し、邦人の適応レベルの向上を図るとい進め方が考えられる。

また、本研究では、鈴木 (1990) が提示した「滞在期間」と「文化間移行の動機」の 2 次元で文化間移行者の整理を引用し、本研究の対象者である留学生と海外勤務者の位置づけを明確にした。しかし、このような整理がある以上、動機 (もしくは留学生か勤務者か) や滞在期間によって中国人の特徴や文化適応課題に対する認識が異なる可能性が十分にあると考えられる。したがって、今後、対象者の「動機」と「滞在期間」による整理が必要と考えられる。

さらに、本研究では、Nisbett & Cohen (1996) の知見を引用しながら、自由記述から得られた分類に対して、仮説的構成を行った。しかし、本研究の分類については、BC の間だけではなく、MC の間、そして、SC の間でも、ミクロ・マクロの相互作用は十分にありえたりする。カテゴリー間につなぐ矢印は、部分的に双方向の矢印を引く場合など否定できないものもある。Nisbett & Cohen (1996) の知見のみでは、全ての側面を結論付けるには限界があると考えられる。今後、分類に対する仮説的構成を補強する議論など、さらなる検討が必要と考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

本研究のデータに対する KJ 法に基づく分析に、吉野絹子先生 (神戸学院大学人文学部教授 (当時)) と

趙毅飛さん（神戸学院大学大学院人間文化学研究科（当時））にご協力いただきました。記して感謝を申し上げます。

引用文献

- Adler, P. S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology, 15*, 13-23.
- 天児 慧 (2003). 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会
- Berry, J. W. (1989). Imposed etics-emics-derived etics: The operationalization of a compelling idea. *International Journal of Psychology, 24*, 721-735.
- Berry, J. W., Kim, U., & Boski, P. (1988). Psychological acculturation of immigrants. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Cross-Cultural Adaptation: Current Approaches* (pp. 62-89). Newbury Park, CA: Sage.
- Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H., & Dasen, P. R. (1992). *Cross-cultural psychology: Research and applications*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cushner, K. & Brislin, R. W. (1996) *Intercultural interactions: A practical guide* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Furham, A. & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar Environments*. New York: Methuen.
- 外務省 (2021). 海外在留邦人数調査統計 (令和3年) Retrieved from https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000044.html
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Anchor Books.
(ホール, E. T. 岩田慶治・谷 泰 (訳) (1979). 文化を超えて TBS ブリタニカ)
- Hwang, K. K. (2006). Constructive realism and confucian relationism: An epistemological strategy for the development of indigenous psychology. In U. Kim, K. S. Yang, & K. K. Hwang (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context* (pp. 73-108). New York: Springer.
- 池田謙一・村田光二 (1991). ころと社会—認知社会心理学への招待— 東京大学出版会
- 川喜田二郎 (1986). K J 法—渾沌をして語らしめる— 中央公論社
- 木村昌紀・毛 新華 (2013a). 日本人と中国人の親密なコミュニケーションは何が違うのか?—未知関係と友人関係を対象にした検討— 感情心理学研究, 21, Supplement 号, 9.
- 木村昌紀・毛 新華 (2013b). 日本人と中国人の討議的コミュニケーションは何が違うのか?—未知関係と友人関係を対象にした実験的検討— 日本心理学会第77回大会発表論文集, 145.
- 近藤 裕 (1981). カルチュア・ショックの心理 創元社
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright Grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin, 7*, 45-51.
- 毛 新華 (2013). 日本人から見た在日中国人留学生の文化適応の問題点—日本人を対象とする自由記述調査のデータより— 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 196.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2006). 中国の若者の人づきあいスタイルについての研究—自由記述調査結果によるカテゴリカルな検討— 対人社会心理学研究, 6, 81-88.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2012). 中国文化の要素を考慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムの開発および効果の検討 パーソナリティ研究, 21, 23-39.
- 毛 新華・大坊郁夫 (2016). 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果—中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討— 社会心理学研究, 32, 22-40.
- 毛 新華・清水寛之 (2019). 訓示的教示アプローチによる日本人の中国文化適応の促進—大連市 (中国) の在留邦人を対象とした異文化適応セミナーの効果— 神戸学院大学心理学研究, 2, 1-8.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- 箕浦康子 (1990). 文化のなかの子ども 東京大学出版会
- 日本学生支援機構 (2021). 2019 (令和元) 年度日本人学生留学状況調査結果 Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2019.html>
- 西田ひろ子 (2007). 米国、中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦 風間書房
- Nisbett, R. E. & Cohen, D. (1996). *Culture of honor: The psychology of violence in the South*. Boulder, CO: Westview Press.
(ニスベット, R. E. & コーエン, D. 石井敬子・結城雅樹 (編訳) (2009). 名誉と暴力—アメリカ南部の文化と心理— 北大路書房)
- 西村洲衛男 (1992). 文化とは 山中康裕・川上範夫・西村洲衛男 (編) 臨床心理学第5巻 文化・背景 (pp.3-21) 創元社
- Oberg, K. (1960). Culture Shock: Adjustment to new cultural environment. *Practical Anthropology, July-August, 177-182*.
- Peng, K., & Nisbett, R. E. (1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist, 54*, 741-754.

- 清水寛之 (2002). 子どもの認識の発達と文化 井上智義 (編) 異文化との出会い! 子どもの発達と心理—国際理解教育の視点から— (pp.12-28) ブレーン出版
- 清水寛之 (2005). 文化と記憶 金児暁嗣・結城雅樹 (編) 文化行動の社会心理学 (pp.8-19) 北大路書房
- 園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会
- 鈴木一代 (1990). 異文化に滞在する家族の適応に関する研究 東和大学紀要, 16, 175-187.
- 鈴木一代 (1997). 異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の人間— ブレーン出版
- Takai, J. & Ota, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
(トリアンデイス, H. C. 神山貴弥・藤原武弘 (編訳) (2002). 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)
- 植松晃子 (2004). 日本人留学生の異文化適応の様相—滞在国の対人スキル, 民族意識, セルフコントロールに着目して 発達心理学研究, 15, 313-323.
- 渡辺文夫 (1995). 異文化接触の心理学—その現状と理論— 川島書店
- 吉村 章 (2012). 中国人との実践交渉術 綜合法令出版

—2021.9.4 受稿 2021.11.2 受理—